
Precious Melody1.5 "Encore";

七海くれは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Precious Melody 1.5 "Encore"

【Nコード】

N14710

【作者名】

七海くれは

【あらすじ】

あれから数ヶ月。

順調に愛を育んできたはずの2人だが、ある時を境に陰りを見せ始める。

この壁にそれぞれ立ち向かった先に見えてきたものとは……

季節は秋を迎えていた。キャンパス内の木々も茜色に染まり、いよいよ季節を感じられるようになってきた。

そんな風流な情景をまったく意識せずに闊歩する青年がいた。手塚周一、その人である。

「はあ……… かつたりい。いきなり3限が休講になりやがったから5限までなぐんにもする事ねえよ」

彼は授業にはしっかりと出ているものの、その姿勢からはやる気の欠片も見受けられない。

それでも前期の単位は一通り取得できたのだから、運がよかったのか、はたまた単位認定が甘かったのか。

「しかし慌ただしいな。さつきから同じ上着着てる奴らが走ってるし……。なんかあんののか？」

そうつぶやく彼の隣を、やはり見慣れた上着の男女が駆け抜けてゆく。すると……。

「周一~~~~~!」

「げ……、うるせーのが来た」

向こう側から周一に向かって走ってくる少女がいた。上原芽衣、周一の彼女である。

彼らは数ヶ月前、様々な出来事を乗り越えて今の関係に至る。

ちなみに彼を『周一』と呼ぶのは、親族以外では今のところ彼女だけだ。

「おはよー! ねえねえ、ご飯食べた？」

「ん……… まだ。芽衣は？」

「ボクもまだ。いっしょに食べよ？」

「おう。断る理由もねえしな」

「わーい! 周一大好きー!」

「だああ! 何でそこで抱きついてくるんだ!？」

「好きなものは好きだからしょーがないじゃない！」

「だ、だからってなあ……って！ 引っ張るな！ 袖が伸びるっつーの！」

彼の声は届いていない。引っ張られるがまま、何もできなかった。

「おい？ 学食通り過ぎたぞ？」

「わかってるよ」

「じゃ何で……」

「ボクが作ってきたの！」

「あ、そうなのか……。でもそれ食う場所って別に学食でもよくなえ？」

「ダメなのー！」

「……アンタら、何してんのよ？」

「みさき……。ちよっと助けてくれよ」

「いやーよ。アタシこー見えても忙しいのよ！ まったね〜ん」

「ばいばいー！」

(芽衣ちゃん……、うまくやりなよ)

突然現れ、すぐに彼らの前から去っていった彼女の名は……原田みさき。姉御肌の女の子である。

恐らく『忙しい』というのは真っ赤な嘘で、彼らの邪魔をしたくなかったのだろう。

「ここでいい？」

「ああ……もうどこだっていいよ」

「はい、これ周一の分ね」

「おう、サンキュ……って、なんじゃこりゃ!？」

芽衣から手渡された弁当箱を開けた途端、彼は驚愕の声を上げていた。

それというのも、ご飯の上に乗せられた桜でんぶがハートの形を作っていたのだ。

しかも、ご丁寧とその下に『I Love You』とまで書か

れていたのだ。

「えへへー、かわいいでしょ？ 自信作なんだよ？」

「……」

周一は無言で箸を持ち、目の前の物体のちょうど半分のところ
切れ目を入れようとした。

……すぐに芽衣が止めたのは言うまでもないだろう。

「あゝ！ 何てことするのよー！ もー！ 周一のばかばかー！」

「だから痛てーっての！ どーせ食っちゃまえば同じだろ？ 違うか
？」

「むにい……。違うもん……。……うう」

「……分かったよ、悪かったよ」

「周一……」

小声で彼の名をささやきながら肩を寄せ合う芽衣。周一はそんな
彼女の頭を優しく撫でてやる。

(……俺、こんなことしてていいのか……？ こいつも、俺なんか
でいいのかよ……?)

このような生活が続くにつれ、何故かそんな心配をしてしまう。

誰も悪いとは言っていないし、芽衣本人も悪いとは思っていないの
だが。

周一が5時限目の講義を終えて教室を出ると、すぐさま芽衣に腕
をつかまれた。

「周一、お疲れ！ 帰ろっ？」

「……ああ。でも送るだけだぞ？」

「ええ〜？ しょうがないなあ。残念だけど……」

(ちっ……。あんまり俺を……。縛りつけんじゃねえよ……)

「えっ？ 何？」

「いや、何でもない。ほら、行くぞー！」

「あゝん、待ってよあゝ」

周一の自転車は二人を乗せて風を切るように走った。
中学、高校と陸上部に所属していた彼は、その中でも短距離走を得意としていた。

そのため足腰と瞬発力は鍛えられており、常人の比ではなかった。その能力は自転車をこぐ上でも活かされており、瞬間的に猛スピードが出せる。

どうやら瞬間的には、下手な原付自転車よりもスピードが出せるようだ。

「ちよつと〜、早すぎるよ〜！ もっとゆっくり行こうよ〜」

「黙つとけ。舌噛むぞ〜！」

そして3分後……まさにあつという間に芽衣の家まで着いてしまった。

「むにい、ゆっくり走ってって言ったのに……」

「そうだったか？ 聞いてないぞ？」

「言っていないけど……いつもそうだったじゃんかあ」

「知らねーな。言わなかったお前が悪いんだ。俺を責めるより自分で反省したらどうだ」

「うう……」

（いい加減にしろよ。俺が何でもお前の言うこと聞くと思ったら大間違いなんだよ……）

「……どうしたの？」

「いや、どうもしない。じゃ帰るよ。またな」

「うん、ばいばい〜！」

半ば逃げるように、周一はその場を立ち去る。

彼は、最近の芽衣の行動に嫌気が差していた……というより嫌悪感さえ感じていた。

学校内では常に一緒にいようとするとするし、見つからなければメールなり電話なりで場所を聞いてくる。

それが応答があるまで続くのだからたまったものではない。

昼食も頼みもしないのに作ってくるし、帰りも一緒になろうとす

る。

それだけでは飽き足らず、自分の家に泊ませようともするのだ。自転車をこいでる間、彼は先月の自分の誕生日のことをふと思い返していた。

「あの日からだな……。あいつがうざくなったのは」

9月11日、この日は周一の誕生日であった。彼女という存在と共に迎える初めての誕生日でもある。

そんな彼は芽衣から思いがけないプレゼントを2つもらっていた。ひつつは……

「何だこりゃ？」

「……開けてみて」

小さな箱のラッピング（お世辞にも整っているとは言えないもの）を開けてみると……中から鍵が出てきた。

「……鍵？ 何で？」

「それね……ボクんちの合い鍵なの。シュウくんには……ここにいつでも来てほしいの……」

「えっ……？」

「いつでも来ていいんだからね」

「……」

「ボクは……周一ともっともっと一緒に居たいから……」

「……芽衣？ 今お前……俺のこと……」

「あ……うん。ちょっと呼んでみたの。……ダメ？」

「……いいよ。お前がそれでいいなら」

「ありがとう……。ボク、すっごく嬉しい……」

「芽衣……」

「周一……」

自然と重なり合う唇。その状態はいつまでも続き……いつしか彼らは抱き合っていた。周一が芽衣を優しく包む。芽衣はそれを受け

てうつとりとまどろむ。

ふたりだけの夜は更けてゆき……周一は二つ目のプレゼントを受け取った。

「……あの日は俺もちよつと暴走気味だったな……って、そうじゃねえ！ ……はあ、どうすりゃいいんだ？ これじゃ俺の体がもたないぜ……」

再びペダルをこぐ足に力をこめる。自転車はさらに速度を上げ、風を切って走り抜けていった。

「はあ、今日の周一、なんだか変だったなあ。ボクはこんなに好きなのに……そっけないなあ……」

ひとりきりの部屋でつぶやく芽衣。

一人暮らしを始めた当初の部屋に若干男性らしさが出てきたそこには、お揃いの食器などが置いてあった。

ひとりが暮らすにはやや広いこの部屋も、二人ならちょうどいい。芽衣は、いつでも周一が来るのを待っているのだ。

その時……不意にドアをノックする音が聞こえてきた。

「あれ？ 誰だろう？」

小走りで玄関に向かう芽衣。ドアを開けるとそこには、一人の少女が佇んでいた。

「あー！ 凜子ちゃんじゃない！ どうしたの？」

「こんばんわー！ 近くに来たから寄っちゃったんよ」

「あ、こんなところで話すのもなんだから上がったってよ。散らかってるけど……」

「ええよそんなん、気にせえへんわ。ほなお邪魔しまーす！」

彼女の名は袖月凜子。数年前この辺りに引っ越してきた同い年の女の子である。

そんな彼女がなぜ芽衣と知り合いなのかは、彼女らの共通の友人

である秋野圭輔という青年の働きかけによる。

そして彼女は今、嶺山拓真という青年と付き合っている。

芽衣とは会う度にいつもお互いの恋愛について語り合っているのだった。

「芽衣ちゃん、最近シユウくんとはどないなん？」

「へっ？ えつとねえ……なんだか最近そっけないの……」

「そらいつもの事やん？ うちシユウくんにあんま会ったことないねんけど、圭輔くんの話聞く限りやと、ちよつと冷たくされたかてしよーがないように思えるで」

「だけど……」

「だけでもバットもあらへん。だいたいなあ芽衣ちゃん、ちよつと彼を束縛しすぎなんちゃうか？」

「えつ……？」

「うちの場合はね、お互いに多くは求めてへんのよ。タツくんもうちも、ただ一緒に居られたら、それだけでごっつう幸せって思てんねん……」

「ちよつとー、凜子ちゃん？」

「……はっ、ごめんな。とにかくな、芽衣ちゃんはわがままや！もしホンマに束縛してる、あるいはちいともそんな風に思っフシがあるんやったら彼がかわいそうよ！」

「う……。そこは否定できない……」

「シユウくんはシユウくんなりに芽衣ちゃんに接してるはずなのに、芽衣ちゃんは満足せえへん。してくれん」

凜子はテーブルから身を乗り出すように、芽衣に正面から向き合っつて次々と言葉を発していく。

「せやから彼は、自分でも好きって言ってもーた以上、彼女である芽衣ちゃんを満足させようとなんとかする。せやる？」

「うん……。あつ凜子ちゃん、それは……」

しゃべり続けて喉が渴いたのか、凜子は近くにあったグラスの液体を飲み干していた。

だが、それは芽衣が帰宅時に飲んでいたカクテルだったのだ。

凜子は一瞬顔をしかめたが、それでも構わず続ける。

「はう、これお酒やんか。未成年が酒飲んだらアカンやん！ まあええわ。あのな？ このままやとシュウくん、いつか倒れてまうで？ もーちよい譲歩せえや、な？」

「うん……うん……」

「だいたいなー、何やねんこの明らかに狙ったとしか思えへん揃いのマグカップは！？ 夫婦茶碗かいな？ こないな事されたら、男の立場からするとごっついプレッシャーやで？」

「そうなのかなあ……。だってだって、仲良くなるならまず身の回りからって……」

「はあ？ そんなん聞いたことないわ。これはうちの推測でしかないんやけどな、芽衣ちゃん、もしかしなくても早よ結婚したいとか今出来なきやイヤやとか思うとるんちゃうか？」

「……。うん……」

「図星かいな。結構なことやな。うちもいつかはタツくん……って、それはええねん。でもな？ 考えてもみい。まだ二人とも、親に扶養されとるわけやん」

「周一は確かにしてないけど、ボクは……」

「ちやうねん。親御さんの仕送りで家賃払うとるんやろ？ ここのあとアレや、学校の学費も」

「うん。たまにお米とか野菜とかも送ってくれるよ」

「それじゃまだ自立したうちに入らんわ。それに、その仕送りがもし止まったらどないや？ 路頭に迷わんか？」

「うん……うん……」

「シュウくんなんか、まだ一人暮らしもしてへんやん。それが悪いつちゅーこつちやないねんけどな」

「うん……。車の免許も持ってないし、バイトもしてないし……。つてかした事ないって」

「まー、それはタツくんもそうやし、うちもそうやけどな。でも今

はそれでもええねん。学生のうちから結婚なんて無謀もええとこや」
この辺りから、凜子の口調がややきついものになってくる。芽衣もその辺りに気づいたのか、あまり波風を立てないような応対が続く。

「せめてどつちかが手に職つけてな、ホンマの意味で一人で生きていける、自立してからやな。でも今の自分らはどないや、二人合わせたかて無理やる？」

「う……」

「うちらだつて無理よ？ もっと無理よ。だから今はそこまで考えへんの。先のは先つて割り切ってるのよ」

「う……うん……」

「だつたらなあ、あんまり多くを求めたらアカンねん。な？ それでも現状に不満があるならさっさと別れた方がええ。こないに広い世界や、探せばもつとええ男はぎよーさんおるで」

「……っ！ ひどいよ……凜子ちゃん……。周一はボクの中で一番なんだよ？ 他の人なんかと比べられないよ……」

「でもそっけないんやろ？ 不満なんやろ？ 始めに確かに言うたよなあ。はつきり覚えとるで、うち」

「そっけないとは確かに言ったけど……不満とまでは言っていない！」

「おんなじことやん！ 大声出さんといてよ！！」

「凜子ちゃんだつて出してるじゃないか！！」

テーブルを隔ててにらみ合う二人。一気に険悪な雰囲気は漂っていた。

一方その頃……周一は帰宅したものの、どうにもやりきれなくなつたので、秋の夕暮れをバックに自転車を走らせていた。

(俺は何をしているんだ？ 足が勝手に動く……)

気づくと自転車は見慣れた場所である喫茶店『Hexagram』にあった。

「この店主である増田六（通称マスター）という男は、この店をたった一人で切り盛りしている。」

彼の持つ不思議な輝きを放つ目に見つめられると、まるで心の中まで見透かされてしまうかのようだ。

周一は店のドアを開ける。ドア上部につけられた小物が小気味いい音をかき鳴らす。そしてすぐさま爽やかな挨拶が飛んでくる。

「いらつしやいませ。お、周一くんじゃないか。よく来たね、ゆっくりしてつてよ。」

「……ども」

軽く会釈をしつつカウンター席に座る。だがその直後、近くに座っていた青年が声をかけてきたのだ。

「キミ、シユウくんでしょ？」

「……ん？ あつ、お前は……えつと……」

「嶺山拓真。ミネタクでいいよ。どうしたのこんな時間に？」

「ん……いやな、ちよつと」

「……何があつたか知らないけど、元気出しなよ？ もし何かあつたら相談に乗るよ？」

「そうそう、僕も居ることだし、ゆっくりコーヒーでも飲みながら落ち着いて話してくださいよ。」

「悪いな……。あのな……」

周一は拓真とマスターに現在抱えている悩みを打ち明けた。

「……そうなんだ、いろいろ大変だね……」

「ああ……。気がつけばいつも隣にいるみてーな、そんな感じ。傍から聞いてりやなんて贅沢な悩みなんだって言われそうだけど、四六時中付きまとわれてちゃ体もたないよ。」

「……」

「俺にも俺の時間があるんだつての。いくら彼女だからつてそれを奪っていいわけねえじゃんかよ……」

「ちよつといいかな。それをはつきり言ったの？」

「……は？ 何で言わなきゃなんねえんだ？」

「直接言ってもいけないのに僕たちにグチったの？ それは何か間違ってるよー！」

「……どういことだよ」

「ん〜……だからね、キミにとっての芽衣ちゃんは何なのか？ っ
てこと」

「芽衣は……俺の彼女ですよ」

「それはわかってる。でもさっき自分で言ったよね？ 『彼女だからってうんたら』って。自分の時間を奪われたくないんならそう言わなきゃ。言わないから止まらないんだよ、わかる？」

「だって……言ったら……」

「言ったら？ もしかして、言ったらどうなるかわからないって心配してたりする？」

「ああ……。当たり前じゃねーか。今のこの、彼氏彼女の関係が……」

「そついうの言ったくらいで、芽衣ちゃんの気持ちって動くもんかね？」

「……」

「動くもんか。大丈夫だから、押し黙ってちゃダメだって。義務的な付き合いを続けたってどっちも楽しくないよ。恋愛は楽しくやらなきゃー！」

「……」

無言で、マスターの淹れてくれたコーヒーをブラックのまま一口飲んだ周一。

彼は甘党のためコーヒーをブラックで飲むことはほとんどなかったが、この時は無意識のうちにブラックのまま口に運んでいた。

芳醇な香りとほのかな苦味が、彼の心を優しく癒すかのようだ。

「じゃあ何か、嫌なら嫌ってはつきり言えってか」

「そつだよ？ 同じようなことになったら僕だって言うよ。僕らはね、お互いに多くは求めてないんだ。リンリンと二人つきりであら

れるだけで……幸せだっと思えるんだから……」

「……ミネタク？」

「あっ、ごめんごめん。とにかくね、シユウくんはもっと素直になつたほうがいいよ！ 強がってるのかどうか分からないけど、自分を偽って何になるの？」

「う……」

「言うねえ拓真くんも。まるで僕の若い頃を見てみたいだ。……まあ、そんな感じ。あの時芽衣ちゃんに素直に告白できたキミなら大丈夫。きつとできるよ」

「マスター……。ミネタク……。また世話になつちまったな……」

「いいんだよ。僕はただ応援したいだけなんだ。同じように恋愛してる友達が悩んでるのを見過ごす理由がどこにあるのかな？」

「誰かを愛するのに理由がないのと同じように、誰かを助けるのも理由はいらないんだ。つてことは、誰かを助けることの根底には『愛』があるつてことなのかな？」

「それはどうなんでしょうかね。ははっ……」

「どうだろうかねえ。はっははは！」

「はは……」

声高らかに笑つマスター……。その時、別のテーブルから注文が入つたので彼は急いでそのテーブルに向かって行ってしまった。

「……相変わらず忙しそうだな」

「だよ。……マスターには好きな人っていないのかな？」

「さあ……」

それから彼らは、他愛のない雑談を始めた。

この二人がこうして同じ席で話し合うことは今までなかった。自然とお互いの過去などの話になっていた。

もつとも拓真の方はいくらか事実を隠していたのだが、それは周にはわかるはずもなかった。

一触即発の空気が流れる中、先に折れたのは凜子の方だった。

「ごめんね、大声出して。でもな、うちの考えは変わらへんよ。うちが最初にどうや？ って尋ねたときはそっけないって言った。はつきりと不満の意をあらわにした」

「……………」
凜子が折れたので、芽衣も気持ちを落ち着かせて彼女の言葉に耳を傾ける。

「ってことは、芽衣ちゃんはシュウウくんに冷たくあしらわれるのが不満なんやろ？」

「そうなのかなあ……………」

「そっや！ でもな、芽衣ちゃんは彼のことが好きなんやろ？」

「うん。こないだも同じこと聞かれたけど、それだけは誰にも負けない」

「せやったら……………あーもう、そーゆー部分も含めて好きになっただとちやうんか！？」

「う……………うん……………」

「じゃーもうええやん！ 冷たかろーがそっけなかろーが、ホンマに好きならくじけるんやないわよ！ ……芽衣ちゃん、あんたそーやってずっとみんなに迷惑かけてきたんやろ」

「……………！」

「自覚あるみたいやな。でも、それは悪いこっちゃない。悩むんならいつくらでも悩めばええねん。うちらはいつでも相談に乗ってやるさかいな」

凜子はその平坦な胸を拳で叩き、任せておけという意思表示を見せた。

「せやけど、同じ問題で何度も何度も悩むのはどうかと思うのよ。腹割って話し合っつて出した答えを、なんで自信持って振りかざせへんの？」

「う……………う……………」

いつしか、芽衣の大きな瞳には涙が浮かんでいた。

凜子の言葉に全く反論できないのが悔しいのか、それともその通

りに出来ない自分が情けないと思っっているのだろうか。

そんな彼女の様子を察知した凜子はそつと腕を伸ばし、彼女を優しく抱きしめた。

「泣かんでもええ。大丈夫や、芽衣ちゃんなら。自分を信じてがんばりいな。な？」

芽衣の耳元でささやくと、いよいよ抑えが効かなくなってきた、熱い滴が滴り落ちた。

「うん……。ありがとう……。ごめんね……。ごめん……」

外はすっかり暗くなってしまっていた。そんな最中、芽衣は凜子に抱きしめられながら静かに涙を流していた。

いつしか凜子の眼にも、それが浮かんでいたのだ。

恋に恋する二人の少女の見る夢は、いつでも同じものだった。

月日は流れ……。学生たちにはいよいよ冬休みが目の前に差し掛かっていた。

大学の後期の授業期間は12月末から1月頭までの冬休みをささんでおり、もう間もなくその冬休みがやってくる。

街はすっかりクリスマススの様相を呈していて、すれ違うカップルも心なしか幸せそうだ。

そんな幸せ満載の街を、世界中の不幸を背負ったようにうつむきながら独りで寂しく歩く青年がいた。

彼の名は森野翔司。どうやらまだ意中の彼女に告白できていないようだ。

「ちつくしよー、どこもかしこもカップルだらけじゃねーか！ ありえねえって。はあ、あ、音遠ちゃん……」

相変わらずうつむいたまま、誰かの名をつぶやく翔司。……とその時、特徴的なツイントールの髪形をした少女とすれ違った。

「……！？ あれは音遠ちゃん！？ ……ききき、来たー！ クリスマスの神よ、今だけはアンタを信じたぜ！」

飛び跳ねるように意気揚揚とその少女の後をつける翔司。しかし

「……おせーよバカ。何やってたんだよ。こんなクソ寒い中待たせやがってちくしょーめ」

「あうう……、ゴメンねうお兄ちゃん。ちょっと迷っちゃったの……」

「ま、いーか。お前も寒かっただろ？」

「うん……。でもお兄ちゃんと一緒ならあったかいよ　きゃう」
彼女には彼氏とおぼしき男がいた。その彼にしがみ付くように寄り添う少女の表情は心の底から幸せそうであった。

そして次の行動は……負け犬・翔司を死の淵へと追いやった。

「本当の兄妹でもいいよ……。せめて今日……ううん、今だけは……お兄ちゃんの彼女でいさせて……ね」

まどろみながらつぶやくと、小柄な体を懸命に伸ばしてキスをする。

それはいつまでも続き……。その時間に比例して翔司の心の傷は増えてゆく。

「……クリスマスなんて……。ざけんなああああ……！」
泣きながらその場を走り去る負け犬……もとい、翔司。

道行く人に何度もぶつかりそうになりながらも、それを紙一重でよけてゆく。

……しかし、ついに誰かと正面から衝突してしまった。

「……っ痛てーなコンチクショー！　ちゃんと前見て歩いてんのかよバカヤロー！」

「それはこっちの……ってあれ、翔司じゃん」

「……圭輔？」

「はは〜ん、読めたぞ？　おおかた、音遠ちゃんと灯夜のラブラブつぶりをこれでもかかってくらいに見ちまったから、やりきれなくなつて走って逃げてきたんだろ」

「う……。そのものズバリだよ。……もういいよオレ。クリスマス

もいつもと同じように独りで過ごすよ……」

「……バカ、二人だ。ついでだからオレも付き合っただけ酒行くぞ！」

「……圭輔！ よっしゃ！ 『モテないギルド』再結成だちくしょー！」

「クリスマスの！」

「バツカヤロー！」

声を揃えて獣のように猛り狂う二人。

肩を組み合い、夜道の向こうに消えていった。

そんな最中……芽衣は自分の家にいた。

実は、凜子と話し合ってからまともに周一と顔を合わせていなかった。

メールもせず、電話もせず、誰かに相談することもなく、漠然と今日まで過ごしていた。

「周一……。むにい……」

抱きかかえていたクッションに顔をうずめて寝転がる芽衣。

時間はすでに夜の9時を回っていた。外はとても寒く、天気予報によると雪の可能性もあるとのことだ。

「今日はクリスマスイヴだよ？　なんで彼と一緒に過ごせないのかな……？」

一般的には、恋人たちが愛し合う日といわれるクリスマス。

彼らは付き合っているはずだが、この日は顔すら合わせていない。

「イヤだよ……。周一に会いたいよ……。くすん……」

いつしか涙していた彼女はそのままの体勢で静かに泣いた。

その時……不意に鍵を開ける音がした。

「……周一？」

彼女には確信があった。この家の合鍵を所持しているのは住んでいる芽衣以外には周一しかないのだ。

もちろんアパートの大家という可能性もあったが、彼女は周一が

来たと言ったのだ。

「……よお」

飾り気のない言葉だが、芽衣はそれを最も待ち望んでいたのだ。たまらずに彼に抱きつく芽衣。

周一は無言で引き離そうとした……が、彼女のいかにも泣きはらした後のような眼を見た途端に思いとどまった。

「バーカ、泣いてんじゃねえよ。来たんだからよ」

「だって……寂しかったんだもん……。ずっと一人ぼっちだったんだよ？ くすん……」

「わかったからもう泣くな。ほら、ケーキ持ってきてやったから」

「……えっ、どうしたの？ 買ってきたの？」

「いや、違う。あんな……？」

周一は先程まで、クリスマススムード一色の街並みを見ていた。

途中で泣きながら走り抜けていく青年とすれ違ったことを除いては、道行く人々はおおむねカップルであった。

「へっ、めでてーな」

ポケットに手を突っ込みながら吐き捨てるように言い放つ周一。

そんな彼の視線には……見慣れた少女が見慣れない服装をしているという、なんとも不思議な光景があった。

「えっ……！？ あれって、みさきと優香さんじゃないか」

そんな二人に、興味本位で近づく周一。

なんと彼女らはサンタクローズの格好をして、ケーキ屋の店頭でクリスマスケーキを売っているではないか。

上半身は温かそうだが、その制服はミニスカートだったために脚はかなり寒そうだった。

「あら？ 手塚さ……んがんぐつ!？」

(ちよっとお嬢！ ダメだって声かけちゃ！ 知り合いに見られるのこっ恥ずかしくてイヤなんだから！)

(それは……失礼しました。ですが……もう遅かったようですわ)
「よ……よお」

「あ……あーらシユウじゃないの。な……なんか用？」

「いらっしやいませ。お買い上げですか？」

(だーかーらーお嬢は黙ってて！)

(……冷たいですね)

みさきは半ば強引に周一の頭を引き寄せ、なにやら耳打ちをした。
(ちよつとアンタ、アタシらがここでバイトしてるってのは黙って
てよね!?)

(……)

(……あーもう、これひとつあげるから、芽衣ちゃんでも食べな
さいよ。その代わりこの事は絶対！ 誰にも！ 言っちゃダメだか
らね！ わかったわね!?)

(わ……わかったよ……)

(わかったらほら、さっさと行く！)

(みさきさん……？ それは売り物……)

(アタシが立て替えとくからいーの！ ……いつまでいるのよ！
早く行きなさいってばー！)

(……おーこわ)

「とまあ、こついうわけだ。……芽衣、あとが怖いから誰にも言っ
なよ？」

「うん、言わない。でもよかったね！」

「いいの……かな」

「いいの！ 貸して、切ってくるから。あ、座って待っていていいよ。
テレビつけとくから」

周一は芽衣にケーキの箱を渡し、言われるがままにリビングに腰
を下ろす。

そして、キッチンで作業する芽衣の姿を見ていた。

「……ホント家庭的だよな。こんな奴と付き合える俺ってやっぱ……身分違いなのかな……？」

何かを決心した周一は不意に立ち上がり、芽衣に近づいた。

「周一？ どうしたの？」

「……芽衣、俺はお前と付き合ってた方がいいのか？」

「えっ……？ ど、どうしたのいきなり」

「俺な、最近思うんだよ。俺とお前じゃつり合わないって」

「何で……？ ボクはこんなに好きなのに……」

「俺だって……好きだよ。だけど……これはただ好きとかそんなんで埋められる溝じゃないと思う」

彼が何を言っているのかわからない。

こうしてクリスマスに自分の家に来てくれたのに、告げられた言葉の内容がおかしい。

「お前は一人でなんだってできる。料理なり、家事全般。でも俺はどうだ、俺は何にも出来ない。俺には何にもない……！」

「そんなことない！ 周一には自転車……」

「それじゃ不釣り合いだ。ぶっちゃけちまえば、そんなもんなくたって日常生活を送る上での支障はない」

ついに自虐的な態度まで取り始めた周一。

自分に素直になった結果、芽衣との離別を決意してしまったようだ。

彼は芽衣から視線を外し、つぶやいた。

「だから……何にも出来ない俺には、何でも出来るお前と付き合う資格なんて……ないんだ……」

「……好きな人と付き合うのに資格なんているの？」

「……」

「そんなの聞いたことないよ……。ボク……本当は一人じゃなんにもできない弱い人間なんだもん……。周一にいてもらわないとなんにもできないの……」

「いや……俺はいつもお前の側にいるわけじゃ……」

「違うの。ボクの心の中にも周一はいるの。実際逢えないときは…
…心の中の周一と逢ってるんだよ」

「……………」

芽衣の温かさが、周一の凍てついた心を溶かす。

永久凍土と化していた彼の心が、救われていく。

「ボクは、周一がいたからこそまで来れた。そしてこれからも…
大好きな周一のために生きていきたいの……………」

「……………それじゃ、俺はこのままお前と付き合いを続けてもいいのか
?」

「うん」

「俺は……………何一つ出来ない。これからお前にいろいろ迷惑もかける
と思う。それでもいいのか?」

「うん!」

「わかった……………。ありがとう。これからもよろしくな」

「ボクの方こそ……………これからもよろしくお願いします……………」
無言のまま抱き合う二人。そして……………。

「芽衣、ちょっとやってやろうか?」

「何を?」

「まあ……………。横になってくれ」

「あ、あれか! やってやって! あ……………」

「何変な声出してんだよ、うっせーな」

「だって……………あ……………、気持ちいいんだもん……………。はあ……………」

「……………お、この辺だな」

「あ……………そこ……………いいよあ……………。もっと……………もっと……………」

「わかってるって……………んしょつと」

「あ……………あ……………あ……………」

「そんな気持ちいいのか?」

「うん……………。すぐ上手だね……………。あ……………ん……………」

「……………疲れた。もういいか?」

「ええ、もう終わりなの？ もっとやってほしかったの……。
じゃ今度はボクがやるね！」

「ああ、頼む……ぐあっ！！ 痛だだだだ！」

「あっ……痛かった？」

「痛てーつてのちくしょー！ 加減しやがれ！……やっばいいや、
あとで自分でやっつく」

「むにい、周一も気持ちよくさせてあげようと思ったのに……。で
も何でそんなに上手いの？」

「ああ……。高校の部活で先輩にやらされたんだ。なまじっか出来
るもんだからいつもやれやれって……」

「ふん。あ、まだ周一の高校時代のこととかあんまり聞いてなか
ったよね？ よかったら今日聞かせてくれないかな？ せっかく一
緒にいるんだからさ」

「ああ。このまま帰るのもめんどくせーから泊まってくよ。いいよ、
話してやるよ。もちろんお前にも話してもらおうからな」

「うん！ 嬉しい きゃう」

「ぐっはああ！？ そ、それって音遠ちゃんの専売特許じゃなかつ
たのか……？」

周一に念入りにマッサージしてもらったおかげで、芽衣の動きは
いつもよりキレのあるものとなっていた。

毎日一人で家事をしているので、知らず知らずのうちに疲労が蓄
積されていたのだろうか。

いつしか外には雪が降っており、文字通りのホワイトクリスマス
となっていた。

そんな世界は、さまざまな人間模様を映し出す。

「あら、雪ですわね」

「ホントだー！ ……アイツら、うまくやってるかな？」

「何のことですか？」
「……こつちの話よ。ほら、もうあがるっ？」
「ええ……。それにしても、今日もよく働きました。今日だけで一万円くらいにはなりましょう」
「も〜お嬢、またお金のこと言ってる……」

「雪……か。久々に見たな」
「きれい……」
「寒くなってきたな、帰るか？」
「うん……。家まで送ってくれる？」
「いいよ。歩いて帰れる距離だし……」
「ありがとう……。和也くん……。わがままなわたしだけど、また来年もよろしくお願いします……」

「お兄ちゃん！ 雪！ 雪だよ！ わーいわーい、雪だうー」
「あんまり走り回るなよー？ 転んでも知らね……って言ってる側からコケてやがんの」
「あうう……。転んじやつたう……」
「つたくお前はしょーがねえな。立てるか？」
「痛い……。立てないの……」
「はあ……。ほれ、おぶってやるよ。……このまま帰るからな。おとなしくしてるよ？」

「……あ、雪だ」
「きれいやね〜。まるでうちらの心の中みたいやね」
「あはは……。それはいくらなんでも言い過ぎだよ」
「何でやねん！ うりゃ！」
「ごふうお！？ な……ナイスツッコミ……。うう」
「きゃあ！？ タツくん！？ アカン、ツッコミが強すぎたわ〜」

「おい雪だぜ！ 珍しいこともあるもんだ」

「まあな……。おうお前ら！ いい機会だ、いい加減悪さやめたらどうだ？ 来年からは」

「だな……。これからはもつとまっとうに生きるよ」

「でも……。いつペンワルやってたオレらが認められんのかな？」

「何言ってるんだよ。それをやってのけたのが目の前にいるじゃねえか。お前らにもこの雪がきれいな物として見えるんならまだ大丈夫だ。あきらめんじゃねえぞ！ わかったな！」

「おう！」

「うお〜い圭輔よ、雪だぜ雪」

「あ〜ほんろら〜。な〜んかいい気分だな、心の中はこ〜んなに寂しいってのによお〜」

「コンビニでよお、ビールでも買ってよお、雪見酒とでもいくか〜？ ええ？」

「ええですなあ。飲みなおすぜ〜うひゃひゃ！」

「クリスマスの！」

「バツカヤロー！」

「雪……。だね……」

「降ってきたか。寒かったからな」

「でもボクはあったかだよ。周りがいるからな」

「そうか……」

「いつまでも……。一緒だからね？」

「もちろんだ。めんどくせえなんて……。もう言わねえよ……」

それぞれの聖夜は更けてゆき、また新たなる道を歩き始めるだろ
う。

どこかの場所のどこかの時代、今日も彼らは生きている。

そして何かを、いつも探し求めている。それは、誰もが夢見る『

Precious Melody』。

耳を澄ませば、ほらそこに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1471o/>

Precious Melody1.5 "Encore";

2011年1月11日23時13分発行